

篠原幸雄からやましたゆきおへ

マンガと生きた50年

2

肉筆マンガ同人誌
つれづれ草とマンガ友だち



ネット配信版・新つれづれ草に掲載の「マンガと生きた50年」は、東京都江東区・森下文化センターにて2017年10月20日(金)から29日(日)の会期で開催しました。新つれづれ草マンガ展「篠原幸雄からやましたゆきおへ マンガと生きた50年」で展示した展示物を再構成したものです。

おやしマンガ同人誌
つれづれ草

マンガ展

篠原幸雄からやましたゆきおへ

マンガと生きた50年



おやしマンガ同人誌「新つれづれ草」の山下幸雄は1970年少年ジャンプから篠原幸雄としてマンガ家デビューその後、マンガ家、デザイナー、編集者としての立場を変えながらマンガとの関わりを持ち続けて生きてきた。そして今再び、やましたゆきおとしてマンガを描き始めた！

入場：無料

日時：10月20日(金)～10月29日(日)
午前9時より午後9時まで(最終日は午後5時まで)

会場：森下文化センター1F展示ロビー

お問合せ：森下文化センター
〒135-0004 東京都江東区森下3-12-17
TEL03-5600-8666 FAX03-5600-8677
都営地下鉄新宿線・大江戸線「森下」駅A6出口より徒歩8分
都営大江戸線・東京メトロ半蔵門線「清澄白河」駅A2出口より徒歩8分
<http://www.kcf.or.jp/>

主催・新つれづれ草 共催・森下文化センター





2、肉筆マンガ同人誌 つれづれ草とマンガ友だち

中学の頃マンガ好きな友達、FさんとKさんもできました。そのときのマンガ友達三人で作ったマンガ同人誌が「つれづれ草」です。

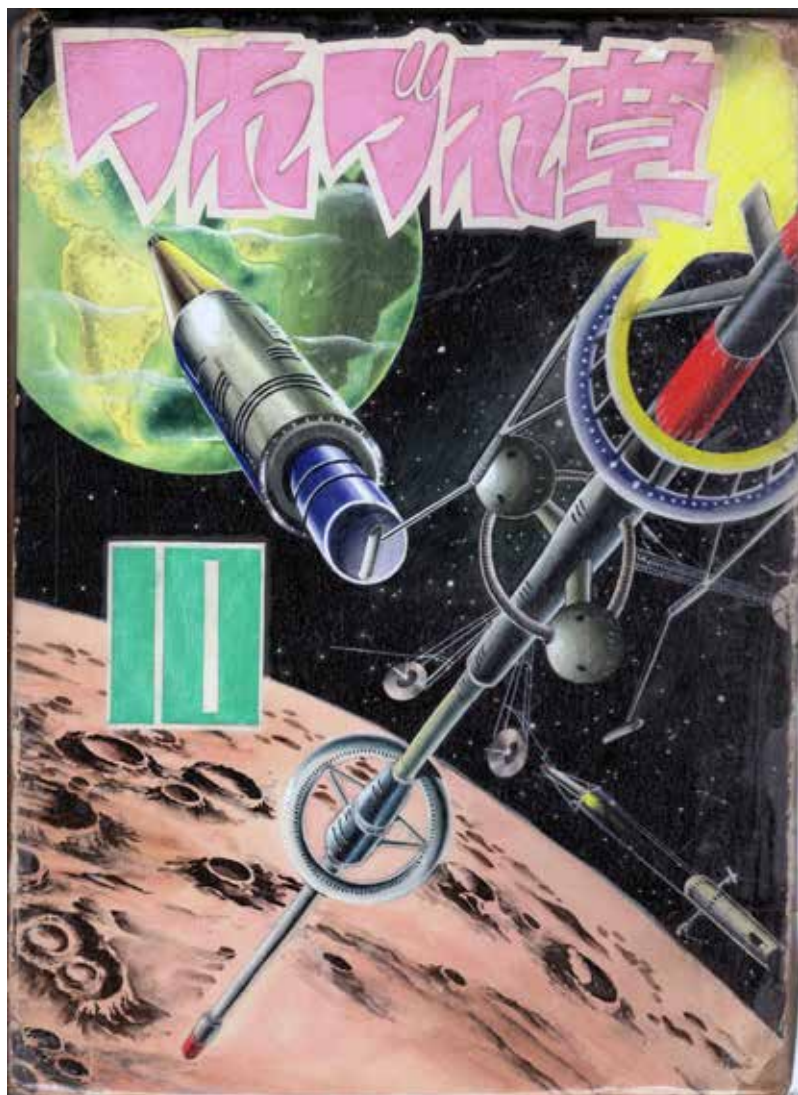
その少しあとに広島にいた「新宅よしみつさん」と知り合っただんです。彼は、Kさんと文通仲間だったことからこのマンガ同人誌「つれづれ草」に参加するようになりました。

文・新つれづれ草第7号掲載
「つれづれインタビューマンガびと」より抜粋加筆



中学生の時、マンガ友達三人で作った肉筆マンガ同人誌「つれづれ草」1号2号の表紙

現存する唯一の肉筆マンガ同人誌「つれづれ草第10号」
昭和44年2月1日発行



その新宅さんが自分の文通仲間を声をかけてくれて、全国からメンバーが集まってきたんです。大和田夏希さん、福田達雄さん、おだ辰夫さん、高岡凡太郎さん、かたおか徹治さん、風忍さん、岩崎健二さん……。

新宅さんが合流し、3号から全国からマンガ仲間が集まった。本格的なマンガ同人誌ができる用になり、大きさもB4判で分厚い立派な同人誌が出来あがった。

新宅さんは高校を中退して上京し、漫画家のアシスタントになったこともあり、つれづれ草の仲間には新宅氏を「ボス」と慕うようになり、「つれづれ草」は、彼を中心に活動する様になりました。そして、「COM」で紹介されたり、新宿にあったマンガ喫茶「コボタン」で展示会をやったりしていました。

田口えつおさんが参加してきたのもそれくらいの時期でしたね。

マンガの仲間が一気に増えたというか。僕は自分でもマンガを載せていたけれど、みんなの原稿を集めて綴じたりするまとめ役をしていて、それはそれで楽しかったのを覚えています。



つれづれ草第 10 号に掲載された作品の一部

肉筆同人誌という原始的な物でしたが、原稿をまとめて本にするという、編集の原点の様な経験をできたのは、私のその後の生き方に大きな影響を与えたのだと思います。

文・新つれづれ草第7号掲載
「つれづれインタビューマンガびと」より抜粋加筆



つれづれ草第10号に掲載された作品の一部

新宿のマンガ喫茶「コボタン」と マンガ雑誌「COM」

高校生になると、毎週週末には新宿のマンガ喫茶「コボタン」に行く様になった。

コボタンの存在を知ったのは、マンガ雑誌COMの小さな広告が地図付きで掲載されていたのを見たからだった。

新宿駅東口を出て、紀伊国屋書店を過ぎ、伊勢丹を過ぎ、画材の世界堂の先、新宿御苑の近くまで行くと、今の地下鉄新宿三丁目の駅当たりに「マンガ喫茶コボタン」はあった。

小さな入口を入ると1階はカウンター席だけの小さな店で、なんだか怪しげな人たちで席は一杯で、ボクはすぐに入口脇にある小さな階段を登って2階に上がる。今のマンガ喫茶とは違

い、マンガ本が読み放題というのではなく、マンガ雑誌COMに掲載された作品のマンガ原稿などが壁に貼ってあり、原画展をやっているの
で、ここがマンガ喫茶と分かる程度の店だった。

ただ他の喫茶店と違う所は、実際のマンガ雑誌の編集者とマンガ家がここで打ち合わせをしていたり、ボクの様なマンガ家志望の少年たちが集まってきていたりして、なんだか特別な空間だったことは確かだった。

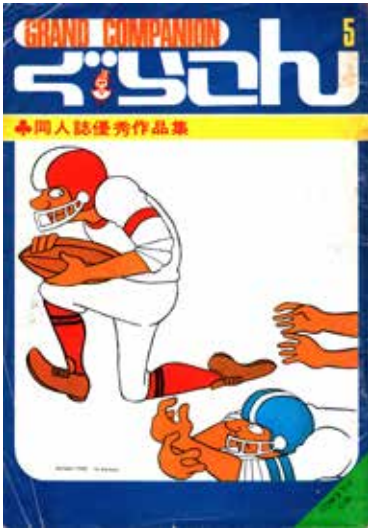
人見知りのボクは、コボタンに行っても他の客に積極的に話しかけるわけでもなく、ただその不思議な空間の中にいることに満足して浸っていたのかも知れない。

同人誌「つれづれ草」が雑誌COMの同人誌特集に取り上げられたことで、同じ同人誌の「墨汁三滴」と合同マンガ原画展をコボタンでやることが出来たり。その後大変お世話になる少年ジャンプの編集者の角南さん（当時は集英社のマンガ月刊誌「少年ブック」の新人編集者だった）に出会ったのもここ、コボタンでした。

コボタンで角南さんから名刺を頂いたボクはすぐにその気になって、神保町にある集英社の少年ブック編集部まで、自分のマンガ原稿を見

てもらいに行きました。読者コーナーの担当だった角南さんは、カットではなく、見出しを描くレタリングの仕事を発注してくれました。（ボクの絵は下手くそで、とても使い物にならなかったのだと思います）

何にも知らない、ただただマンガを描くことが好きなマンガ少年と、新人マンガ家発掘担当の新人マンガ編集者の角南さんとの戦いがここから始まったのだと思います。



COMの付録「ぐらこん」の同人誌特集で「つれづれ草」が紹介され、新宅さんの作品「逃がしの報酬」も掲載された。